

---

# 命の水

月読

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

命の水

### 【コード】

N1280B

### 【作者名】

月読

### 【あらすじ】

少女の耳に届く、叫び。どこから聞こえるのか、誰の声なのかも分からない声

振り返るが、誰もいない。

誰かに呼ばれたような気がしたのだけれど

・・・

少女はマニキュアを塗る手を止め、胸に絡み付いてくる黒い苛立ちを吐き出すように深い溜息を吐いた。

ここ数日時々感じる、声。

部屋で化粧をしているときでも、電話をしているときでも、寝起きでも就寝前でも関係なく。

痛みを伴うような、苦しい苦しい、声。

何を叫んでいるのかは聞き取れない。聞き取れないほど小さな声なのだ。

どこから聞こえるのかもよく分からない。

ただ一つ言える事は、その声は自室にいるときにだけ聞こえるという事だけだった。

気味が悪く、数日前に彼氏に話してみたが、彼は真に受けてはくれなかった。

「は？何ソレ。あれじゃね？心霊現象つて奴！！心霊写真撮れるかもしんねーぞ」

揶揄する様なその口調に怒った。

あれ以来、彼氏には会っていない。

「はぁ・・・マジ最悪」

黒い苛立ちはどんどん肥大して、体にまとわりついてくるような不快感を覚える。

真っ赤なマニキュアを中途半端に塗りかけた爪。

もう続きを塗る気も起きない。

もう寝てしまおうと勢いをつけてベッドに転がった。

そのとき。

聞こえた気がした。

いつものあの声。

いつもより大きな声で叫んだ「助けて」という声。

翌朝、目を覚ますと雨の音が聞こえた。

その音に引かれる様に窓際に寄った少女は、窓枠に置かれた鉢植えを見た。

小さな、小さな鉢植え。

そういえば、いつから水をやっていなかったのだろう。

瑞々しく輝いていた葉は茶色く皺だらけになり、ピンと背を張っていた茎も濁ききり首をもたげている。

頂垂れた枯れた草の向こう側で、雨は静かに降り注いでいた。

少女は鉢植えを捨てた。

もう、あの声は、聞こえない。

## (後書き)

初投稿です。月読つくよみといひます。

読んでくださりありがとうございます！！初めてなので至らない部分が多いかと思いますが・・・

命の叫びを表現しようと思ったんですけど、どうでしたでしょうか。読み終わった後題名を見ると、題名の意味が理解できるかと思ひます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1280b/>

---

命の水

2010年11月2日04時01分発行